

[海外の動向]

海外における語用論の動向 ——ポライトネスとジェンダーの研究——

林 宅 男

本稿では、2004年9月2日から3日間、フィンランドのヘルシンキ大学にて開催された、International Conference on Language, Politeness and Gender: The Pragmatic Roots (CLPG-2004) で発表された研究を、基調講演を中心に、最近のポライトネスとジェンダーの研究の動向と関連付けながら紹介する。

CLPG-2004 は、Second International Symposium on Linguistic Politeness (islp 2) と、Fifth Nordic Conference on Language and Gender (SK 5) の合同会議 (a joint conference) として開催された。islp 2 は、第一回はタイのチュラロンコン大学 (Chulalongkorn University) で、1999年に開催された。SK 5 は、前回はスエーデンのヨテボリ大学 (Göteborg University) で2000年に開催された。この二つの会議では、言語、談話、認知、文化に関する研究が発表されてきたが、その中でも多くの関心を集めてきたものが、ポライトネスとジェンダーの関係についての研究であった。CLPG-2004 は、この二つの分野の研究に一層の深まりと広がりを持たせ、プラグマティックスの原点に戻って現在及び将来の問題を協力して検討する目的で、開催された。今回は、8つの講演 (plenary talks) の他、世界各地からの研究者によって50以上の論文 (そのうち日本からは4件) が発表された。本大会での発表は、一番多かった英語の他に、スエーデン語、ノルウェー語、デンマーク語の三つのスカンジナビア言語でも行われた。

この会議のメインテーマの一つであるポライトネスの研究は、1970年以降、特に Lakoff (1973)、Brown and Levinson (1987 [1978])、及び Leech (1983) 等による体系的理論の提案以来、膨大な量の論文や著書が発表され、言語学、とりわけプラグマティックスの代表的な研究分野としての地位を確立するに至っているが、ポライトネスとは何かという基本的な概念については、未だに一致を見ていない (Kasper, 1990)。この不一致は、上で挙げたこれらのポライトネスの理論は、何れも根源的に西洋の主體的個人主義に基づく戦略的アプローチであり、普遍的ではない、というその後の指摘に最も大きく起因する。この指摘は特にアジアの言語学者によって強く述べられ、社会的規範の側面を取り入れた修正案や代

案も提案されてきたが (Fraser & Nolen, 1981; Hill et.al. 1986 ; Matsumoto 1988; Fraser, 1990; Gu 1990)、他方、そのような批判は妥当ではないという指摘もある (Pizziconi 2003; Fukada & Asato 2004)。更に最近の研究では、ポライトネスを、発話行為的な捉え方ではなく、談話の文脈や相互行為におけるシークエンスの中での現象として捉える方向へと展開されている (Arundale, 1999 ; Usami, 2003)。

このような動向の中で、最近注目を浴びているものの一つに、Watt (2003) の主張がある。Watt は、ポライトネスを、「政略的な振る舞い」(politic behavior) と「ポライトネス」(polite behavior) に区別している。前者は、相互行為に於いて社会的制約に適切と判断される言語行為であり、後者は、そのような期待を越える行為であるとされる (彼は、この著書の冒頭で、ポライト (polite) という語が、語源的には「洗練された」(polished) という意味を持つラテン語の *politus* (過去分詞形) に由来することや、ポライトネスは、ヨーロッパに於いては、歴史的には、貴族の支配した階級的な社会制度の下では相応しい言動の基準として、そしてその後は、権力者として上流階級への仲間入りを果たす手段として機能したと指摘している)。また、ポライトネスは相互行為の中で判断 (解釈) される主観的なものであり、その表現は、関連性理論で言われる「手続き的意味」(procedural meaning) を持つと主張する。

Brown and Levinson のポライトネス理論については、著者自身は、少なくとも英語話者のデータを分析する上ではその有用性を認めてきたが (Hayashi 1996, 1999)、この会議では、その文化的一般性に対する批判を検討し、彼らの理論を修正する普遍的ポライトネスの理論の提案を行った。この理論の大きな特徴は、先ず、フェイスを現実世界における人間の存在の本来的特徴から捉えた一元的な真理に基づき、それを観念的意識に基づく認知的な側面 (部分) と、感情的意識に基づく情意的側面 (部分) から成る、自身についての心理的構築物として捉えた点である。更に、此の二つの部分を、Brown and Levinson 流の解釈ではなく、Goffman (1967) のもとのフェイスの概念に立ち返り、「私的フェイス」と「社会的フェイス」、及び「積極的フェイス」と「消極的フェイス」にそれぞれ分け、これらの関係と、その再帰的形成過程を示した。続いて、日本語等いわゆる社会指標の言語における敬意表現の語用分析に基づき、ポライトネスを、Goffman (1967) の相互行為における「提示的儀式」(presentational ritual) と「忌避的儀式」(avoidance ritual) に相当する二つの語用的儀式と捉え、単一の原理に基づくポライトネス理論と、その実現のモデルを示した。

Chris Christie (Laoughborough University, U.K) の講演は、上で述べた言語の社会指標の機能に関わるもので、特にその機能の象徴的な側面に焦点を当てたものであった。Christie は、Watt (2003) の理論的枠組みを使い、イギリスの下院での討論における議員の謝罪 (apologies) における、「政略的な振る舞い」とポライトネスがどのように実現するかについて分析した。そして、ここでの謝罪は、Brown and Levinson の主張するようなフェ

イスワークではなく、議員の政治的アイデンティティを表現する手段として使われており、その機能は、ジェンダー化したアイデンティティを構築する手段でもあると述べた。

ポライトネスにおける文化的・社会的アイデンティティの側面を捉えた分析は、三日目に行われた Robin T. Lakoff の講演にも見られた。Lakoff は、ポライトネスを Grice の「協調の原理」(cooperative principle) と関連づけて理論化した先駆的な研究者であると同時に、女性の言語使用を、社会・文化的イデオロギーの観点から批判的に論じた最初の研究者でもあり (Lakoff 1975)、その研究は政治や社会的正義とも結びついていると言われている。この講演での発表は、ポライトネスの言語形式そのものではなく、ポライトネスとイデオロギーや社会心理の関係についての分析で、アメリカ社会におけるポライトネスの文化的概念が、公的な場 (政治やビジネス界) における人物の評価にどのような影響を及ぼすかを指摘するものであった。Lakoff によると、アメリカ社会における好ましい人物 (good person) とは、いわゆる「ナイス」(nice) という言葉で概念化される、愛想が良く (これは彼女のポライトネスの第3の原則 be friendly に該当する)、平等的な人であり、その特性は、積極的ポライトネスに当たる、敬意 (deference) や友情 (camaraderie) と結びついているという。ナイスの範疇に入る人は、公の場で少々欠点があっても大目にみられる傾向にあるが、そうでない人は支持を得にくく、特にこのことは成功した女性に当てはまるという。この点について Lakoff は、この講演の時点ではアメリカ大統領候補であった (ナイスな) George Bush の対立候補者 John Kerry と、インサイダー取引のスキャンダルで告発された、いわゆる主婦のカリスマ、Martha Stewart をとりあげ、アメリカ文化に於いてナイスでないことがどのような不利な結果に繋がるかを述べた。

本会議でのもう一つのメインテーマである、言語とジェンダーの関係についての研究も、ポライトネスの研究同様、過去30年の間、特に社会言語学において、最もめざましい進展を遂げてきた分野の一つである。そしてその社会的背景には、60年代からのウーマンリブ運動や、女性の市民権運動、反戦運動への参加の高まりがあったと言われている。この研究は、女性の言語について生成意味論をベースにイデオロギーと関連付けて分析した Lakoff (1975) の著書を契機として (2004年にはその改訂・拡張版が出ている)、音や単語レベルの分析を中心に始まり、後に80年代からは、会話・談話分析の興隆と共に、徐々に上位の言語レベルの分析へと進展していった。始めの頃のジェンダーと言語の関係についての研究は、女性の言語と男性の言語を比較するもので、それには、「欠損モデル」、「文化的相違モデル」、「力と優位モデル」の3つがあり、女性の言語は、それぞれ、表現力に乏しく (inexpressive)、従属的で (subordinate)、協力的 (cooperative) であるとされた (Lakoff 1975; West & Zimmerman 1983; Maltz & Borker; Tannen 1990)。しかし、その後、そのような特徴の違いは異なる文化、文脈や場面、あるいはタスクや行為の種類によって様ではないことが、特に会話分析者やフェミニスト言語学者によって指摘され、その研究は単なる差異について

の静的な (static) 現象の分析から、相互行為におけるジェンダーの実践やその構築過程についての動的な (dynamic) 現象の分析へと、変遷していった (Cameron 1985; Goodwin 1990; Bergvall 1999; Hayashi & Hayashi 2002; Cameron and Kulick 2003)。

この会議でも、従来の対立的なパラダイムに基づいた言語とジェンダーの分析を検証し、その多様性と個性を指摘する研究が幾つか発表された。Inge Pedersen (University of Copenhagen) の講演はその一つで、(感情と) ポライトネスの表現に見られる性差の社会・文化的特異性を歴史的に分析した、ユニークなものであった。18世紀から19世紀にかけてのデンマークでは、その頃の貴族やブルジョワの手紙の表現にみられるように、感受性や感情の表現が重視されていた時代で、特にこのことは男性の人格にあてはまるといえる。Pedersen は、このような共通のイデオロギーがまだ支配的であった、19世紀のデンマークのシェラン島 (Zealand) での農民が書いた当事の手紙や日記を分析し、当事は女性が男性よりも丁寧 (polite) であったとは言えないと報告した。

上で述べた社会・文化的情勢のダイナミックな変遷と言語とジェンダーの関係は、Matsumoto (Stanford University) の基調講演でも示された。彼女は、上述した Brown & Levinson のポライトネス理論を批判した研究者の一人としてよく知られているが、最近ではジェンダーと言語の関係についても論考している。例えば、Matsumoto (2004) では、時代の変遷と共に、日本語の文末助詞の「わ、の」や、「ござーます」のような特殊な発音に見られるいわゆる女性語の使用が少なくなり、(一般には丁寧とされる) 中高年の女性の日本語においても、友達同士の会話では、逆に、「よ」など、男性語と呼ばれる断定的な表現が多く使われるようになったと指摘している。本発表では、中高年の女性の友達同士の会話における、相互行為のスタイルやトピックの選択における変化が言及され、助詞の用法では、例えば「だ」が「だわ」と混じって使われたり、心が傷つきやすい話がこっけいに話されたりというように、女性について規範的とされてきたことが、現在では必ずしも当てはまらないと指摘した。そして、Matsumoto は、これらのいわゆる変種 (variation) は、異なる話者の間だけでなく、同じ話者が同じ話題について語っている時にも見られることから、それには話し手の女性としてのアイデンティティだけではなく、意図、社会的制約、グループ・社会のアイデンティティといった要素が複雑に絡んでいると指摘した。

ここでは紙面の都合でその全てを紹介することは出来ないが、本大会では、他にも、ポライトネス理論については、Bourdieu (1990) の構造、習慣 (habitus)、実際 (practice) の三つのレベルを関連づけるものとしてフレーム (frame) の概念を取り入れた分析的アプローチ (Marina Terkourafi)、及び 選択機能言語学の (特に「評価」(appraisal) の) 概念と社会語用論モデル (socio-pragmatic model) を使った分析 (Luisa Granato)、ポライトネスの文化間の比較・対照を扱った研究については、定型表現の使用をポーランド文化とアングロサクソン系文化と比較して示したもの (Ewa Jakubowska)、ジェンダー研究については、

フレーム分析のモデルを社会記号論 (social semiotics) に取り入れ、批判的談話分析 (critical discourse) の観点から日本における英語の外来語使用を分析したもの (Reiko Hayashi)、ポライトネスとジェンダーの関係の研究では、ジョークが失敗に終わった時の対処の仕方の男女比較 (Dida Akar & Bilgen Erdem)、更に応用的研究では、コンピュータを使った公文書におけるジェンダー差別用語を検索するプログラムの開発の研究 (Michael Carl et.al) 等、多様且つ先駆的な発表が多くあり、この分野における最近の研究の動向を捉える上で、極めて収穫の多い会議であった。

尚、この会議で発表された研究の概要は、CLPG Book of Abstracts (University of Helsinki; ISBN:952-10-1974-3) に収録されている他、その詳しい内容は、論文集として、2005年発刊予定の、*Language, Politeness and Gender* (Nordica Helsingiensia 3, University of Helsinki Press, L. Mattfolk, S. Nordlund & J. Östman (eds.)) に掲載される。

参考文献

- Arundale, R.B. 1999. "An Alternative model and Ideology of Communication for an Alternative Politeness Theory." *Pragmatics* 9, 119-153.
- Bergval, L. V. 1999. "A Comprehensive Theory of Language and Gender." *Language in Society* 28:2,273-293.
- Bourdieu, P. 1990. *The Logic of Practice*. Cambridge: Polity Press.
- Brown, P. and S.C. Levinson. 1987 [1978]. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cameron, D. 1985. *Feminism and Linguistic Theory*. London: Routledge.
- Cameron, D. and D. Kulick. 2003. *Language and Sexuality*. Cambridge: CUP.
- Fraser, B. 1990. "Perspectives on Politeness." *Journal of Pragmatics* 14, 219-236.
- Fraser, B. and W. Nolen. 1981. "The Association of Deference with Linguistic Form." *International Journal of the Sociology of Language* 27, 93-111.
- Fukada, A. and N. Asato. 2004. "Universal Politeness Theory: Application to the Use of Japanese Honorifics." *Journal of Pragmatics* 36, 1991-2002.
- Goffman, E. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face to Face Behavior*. Garden City: Doubleday Anchor.
- Goodwin, M.H. 1990. *He-Said-she-Said: Talk as Social Organization among Black Children*. Bloomington: Indiana University Press.
- Gu, Y. 1990. "Politeness Phenomena in Modern Chinese." *Journal of Pragmatics* 14, 237-257.
- Hayashi, T. 1996. "Politeness in Conflict Management: a Conversation Analysis of Dispreferred Message from a Cognitive Perspective." *Journal of Pragmatics* 25, 227-255.
- Hayashi, T. 1999. "Metacognitive Model of Conversational Planning." *Pragmatics and Cognition* 7:1, 93-145.
- Hayashi, R and T. Hayashi. 2002. "Duality and Continuum in Indirect Talk: Linguistic Style and Gender in Clinical Supervision." In D. Li ed. *Discourses in Search of Members- in Honor of Ron*

- Scollon, 136-169. New York: University Press of America Inc.
- Hayashi, T. (to appear). "Reconstructing a Universal Theory of Politeness." In L. Mattfolk, S. Nordlund and J. Östman eds. *Language, Politeness and Gender*. Nordica Helsingiensia 3, University of Helsinki Press.
- Hill, B., S. Ide, S. Ikuta and T. Ogino. 1986. "Universals of Linguistic Politeness. Quantitative Evidence from Japanese and American English." *Journal of Pragmatics* 10, 347-371.
- Kasper, G. 1990. "Linguistic Politeness: Current Research Issues." *Journal of Pragmatics* 14, 193-218.
- Lakoff, R. T. 1973. "The Logic of Politeness, or, Minding your P's and Q's." In C. Corm, T. C. Smith-Stark and A. Weiser eds. *Papers from the Ninth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*. Chicago: Chicago Linguistic Society. 292-305.
- Lakoff, R.T. 1975. *Language and Woman's Place*. New York: Harper & Row.
- Lakoff, R.T. 2004. *Language and Woman's Place. Text and Commentaries*. Revised and Expanded Edition. M. Bcholtz ed. New York: Oxford University Press.
- Leech, G.N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Maltz, D. and R. Borker. 1982. "A Cultural Approach to Male/Female Misunderstanding." In J. Gumperz ed. *Language and Social Identity*. 195-216. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsumoto, Y. 1988. "Reexamination of the Universality of Face: Politeness Phenomena in Japanese." *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
- Matsumoto, Y. 2004. "The New (and Improved?) Language and Place of Women in Japan." In M. Bcholtz ed. *Language and Woman's Place. Text and Commentaries*. 238-244. Revised and Expanded Edition. New York: Oxford University Press.
- Pizziconi, B. 2003. "Re-Examining Politeness, Face and the Japanese Language." *Journal of Pragmatics* 35, 1471-1506.
- Usami, M. 2002. *Discourse Politeness in Japanese Conversation*. Tokyo: Hitsujishobo.
- Watts, R.J. 2003. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tannen, D. 1990. *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: Ballantine.
- West, C. and D. Zimmerman. 1983. "Small Insults: a Study of Interruptions in Cross-Sex Conversations between Unacquainted Persons." In C. Kramarae and N. Henley eds. *Language, Gender and Society: Opening a Second Decade of Research*. 103-117. Rowley, MA: Newbury House.